

テキストマイニング及び多変量解析を用いたフォーカシング指向グループ
参加者の体験分析—グループ・プロセスに関する仮説生成の試み—【第一報】
Experienced-based Analysis of "Focusing-oriented" Group
Using Text Mining and Multivariate-Statistics
- A Trial of Hypothesis Generation of Group Processes - 【First Report】

押岡 大覚 *

鎌倉 利光 **

寺原 美歩 ***

Oshioka Daisuke Ph.D. *

Kamakura Toshimitsu Ph.D. **

Terahara Miho ***

聖泉大学人間学部 * 愛知大学文学部 **

彦根市子ども療育センター ***

Seisen University *

Aichi University **

Hikone City Child Treatment and Education Center***

要 約

本研究は、第1回フォーカシング指向グループ ("*Focusing-oriented*" Group: 以下, *F.O.G.*) 参加者から得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》に係る自由記述について、テキストマイニング及び多変量解析を用いた体系的、計量的分析を行い、*F.O.G.* のグループ・プロセスに関する仮説の生成を目的とした。その結果、*F.O.G.*参加者は、集団内で「他者との関わりの感覚」を覚え、安心できる存在として他者を感じ、その安心感を基盤として、多方向的な相互作用を経験する。そして、個人が「他者との関わりの感覚」を覚えるようになると、「自己の身体感覚」が賦活され、「自己の発信」が行えるようになるという、満足感に係るグループ・プロセスの仮説が生成された。一方、*F.O.G.*参加者は「他者の身体内感覚を感じられない」、あるいは「自己の身体感覚を感じられない」状態になると、「自己の発信ができない」状態になるという、不満足感等に係るグループ・プロセスの仮説が生成された。ただし、これらの仮説は、第1回 *F.O.G.*のみから得られた限定的なものであり、今後の *F.O.G.*モデル構成全てに適用して考えられるか否かについては、一定の保留が必要である。

Key Words : テキストマイニング, 多変量解析, フォーカシング指向グループ,
グループ・プロセス, 仮説生成

1. 問題意識と目的

我が国におけるエンカウンター・グループ (Rogers, C.R., 1970) とフォーカシング (Gendlin, E.T., 1981) の統合に関する実践と研究は1980年代より盛んに取り組みられるようになり、村山(1980)他の先行研究により、その臨床的意義が見出されてきた。また、フェルトセンス (*Felt-sense*) の言語化を介しての集団的相互作用を用いた心理臨床家に対する教育・訓練を主たる目的としたフォーカシング指向グループ ("*Focusing-oriented*"

Group : 以下, *F.O.G.*) に係る実践と研究については, 2008 年以降, 徐々に蓄積されている現状にある.

なお, 押岡ら (2009) は, *F.O.G.* を次のように定義している. すなわち, 「*F.O.G.* とは, 通常 10 名前後で構成された小集団のなかで, フェルトセンスの言語化を介した集団的相互作用により, ファシリテーターを含めた参加者間の体験的相互作用が促進され, 心理臨床家としての教育的訓練的な場として機能することを目的としたグループである」.

押岡・白岩 (2008), OSHIOKA (2009) は, *F.O.G.* に参加した 1 名についてそれぞれ事例的検討を行い, *F.O.G.* が心理臨床家に対する教育・訓練に資する可能性や問題点等についての報告を行っている.

押岡・勝倉・白岩 (2009) では, それまでに 3 回実施されていた *F.O.G.* から得られた体験過程尺度 (*The experiencing scale*; Klein, M.H. et al., 1970) の 17 名分の評定結果及びデータの不備が認められた 2 名を除いた 15 名分の体験過程尊重尺度 (*The Focusing Manner Scale*; 福盛・森川, 2003) 並びに共感経験尺度改訂版 (*Empathic Experience Scale Revised*; 角田, 1994) の結果をもとに, 量的視点からの検討を行っている. そこでは一般化への慎重な態度を示しながら, 体験過程尺度の結果から, フェルトセンスの言語化を介しての集団的相互作用によって, 参加者各々の体験過程レベルを深めていくことが可能であることが示唆された. また, 体験過程尊重尺度によって測定される「体験過程に注意を向けようとする態度」及び「問題との距離を取る態度」並びに「体験過程を受容し行動する態度」という 3 つの態度 (以下, “フォーカシング的態度”) の遅延効果が確認された.

押岡・勝倉・白岩 (2011) では, *F.O.G.* への継続参加とその効果について, 体験過程尊重尺度及び共感経験尺度改訂版並びに振り返り記録を調査材料に用いた単一事例研究法による検討がなされており, *F.O.G.* の継続経験は, “フォーカシング的態度” 向上等の観点からも心理臨床家に対する教育・訓練に資する可能性が示唆された.

押岡 (2011) では, 不等価 2 群事前事後実験デザインにより, それまでに 4 回実施されていた異なる *F.O.G.* モデル構成それぞれについて, 体験過程尊重尺度及び共感経験尺度改訂版を共分散分析により分析した実証的研究が行われている. その結果, ファシリテーターの人数や参加者の属性の差異, 通いもしくは宿泊等の実施形態の異なる *F.O.G.* モデル構成であっても, フェルトセンスの言語化を介しての集団的相互作用によって “フォーカシング的態度” の指標である体験過程尊重尺度の得点は, 統制群に比して実験群は有意に高いことが確認された.

このように, 事例研究や統計的指標の導入により, 徐々にではあるものの *F.O.G.* の有用性は確認されつつあると言えよう.

さて, これまでのグループ研究, 特にエンカウンター・グループ研究においては, 事例経過とセッション後の参加者の自由記述内容とを照らし合わせる検討方法を採用した研究が多い.

例えば、野島（2000）は、エンカウンター・グループのグループ・プロセス発展段階における、ファシリテーション技法の体系化を目的とした一連の事例研究において、参加者に対して独自に作成した参加者カードを配布し、《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》への自由記述の分析と事例経過の照合により、参加者のエンカウンター・グループ体験についての把握を行っている。また、濱田・野島（2009）は、全7セッションで構成した研修型エンカウンター・グループにおいて、“話すことが難しい”メンバーへのファシリテーション上の課題等について、事例経過とセッション毎の満足度等に関する7件法から得られた量的データ及び満足した点等に係る自由記述の内容から検討している。

このように、臨床実践から得られた自由記述等テキストデータの内容は、事例経過を考察したり、参加者の主観的体験を把握したりする上で重要な役割を担うものとして位置づけられよう。しかし、事例研究やグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Glaser, B.G. & Strauss, A. L., 1967）、KJ法（川喜田, 1970）等に代表される質的研究による分析及び結果の解釈等に際しては、臨床家や研究者の主観の干渉に係る議論が常につきまとう。

そこで、テキストデータを体系的に分析する手法として、近年、注目されているのがテキストマイニング（*Text Mining*）である（石田, 2008）。

テキストマイニングとは、自由記述等のテキストデータを体系的、計量的に分析し、一次資料のみでは見出すことが出来ない有効な情報を発掘（*Mining*）する手法の総称である。この手法を用いることで、テキストデータの分析を行う際の研究者による主観の影響を極力統制することが可能となる。さらに、テキストマイニングによって得られた複数のカテゴリは、主成分分析といった多変量解析により計量的に分析することが可能となる。すなわち、テキストマイニングから得られたカテゴリについて主成分分析を用いた分析を行うことで、研究対象とした事象に係る仮説を生成することが可能となる。

事例研究や質的研究とともに、テキストマイニングを用いた研究によっても、臨床の場及び参加者あるいはクライアント等の内的なプロセスの諸相について説明できる可能性は十分あると考えられる。なお、分析精度の高いテキストマイニングツールの1つとして、*IBM SPSS Text Analytics for Surveys*（以下、*TAFS*）が挙げられよう。

*TAFS*は、自由記述等のテキストデータを①研究目的に沿った形で、ある一定の秩序一例えば、形態素レベルでの解析、構文レベルでの解析等—に則り、キーワード単位に分割し抽出することが可能であること、②抽出されたキーワードは、言語学ベース、もしくは出現頻度ベースにより機械的にカテゴリ化が可能であること、③カテゴリ化されたものをまとめたり、洗練したりする作業を直感的操作によって行うことができること等がその長所として挙げられる。

井上・鈴木（2011）は、看護基礎教育における放射線看護の教育内容について、協力の得られた国内の看護系大学51校より入手したシラバスを、*TAFS*を用いて分析している。その結果、①原理、②放射線治療、③放射線、等計13個のカテゴリが生成され、国内の

看護系大学における放射線看護の教育内容の現状が明らかとなった。また、大和（2010）は、大学におけるキャリア教育を目的とした参加型授業の有効性について検討している。受講生から得られた「授業を受けた感想」及び「受講前と受講後を比べ自分自身が変わったと感じることがあるか」についての自由記述を、*TAFS*を用いて分析した結果、生成されたカテゴリー「授業」は、「就職」、「社会」、「仕事」等のキャリア教育に関連するカテゴリーとの結びつきが強く、また、「発表」、「話す」等の能動性を表すカテゴリーとの強い結びつきが確認され、学生参加型の講義は、キャリア教育上、一定の効果が期待できることが示唆された。

他にも、*TAFS*を用いた先行研究には、林原ら（2011 a, b）、川住ら（2010）、棟方ら（2010）、田中・山西（2011）他が挙げられ、テキストマイニングの注目度の高さを窺い知ることができる。

これまで、複数の分析方法により、その有用性が確認されてきた *F.O.G.*ではあるが、その結果を生み出すグループ・プロセスに係る研究は行われていないのが現状である。

そこで本研究では、第1回 *F.O.G.*参加者から得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》に係る自由記述について、テキストマイニング及び多変量解析を用いた体系的、計量的分析を施し、*F.O.G.*のグループ・プロセスに関する仮説の生成を目的とする。

2. リサーチ・クエスチョン

本研究のリサーチ・クエスチョンは、以下のとおりである。

<リサーチ・クエスチョン1> *F.O.G.*に対する《満足した点》として、参加者は、「自分の身体的感覚（Purton, C., 2007）」を覚えることや他者を感じる等の可能性が考えられるが、*F.O.G.*の参加者が抱くグループ体験に対する満足感等を構成する重要な要因とはどのようなものなのだろうか。

<リサーチ・クエスチョン2> 一方、*F.O.G.*に対する《不満足な点・心残り・気がかり》として、参加者は、「自分の身体的感覚（Purton, C., 2007）」が賦活化されない等の可能性が考えられるが、*F.O.G.*の参加者が抱くグループ体験に対する不満足等を構成する重要な要因とはどのようなものなのだろうか。

3. 方法

3.1 第1回 *F.O.G.*の実施形態、参加要件及び参加者の属性の異同

第1回 *F.O.G.*は、米国 *The Focusing Institute* の認定コーディネーター資格を有する臨床心理士（70代・女性）1名がファシリテーターを担当し、3日間の通い形式、全7セッション（1セッション：90分前後）で行われた。インターネット等の広告媒体及び電子メールによる募集活動を行った結果、事前の参加申し込みがあり、且つ、参加要件を満たした6名（男：20代1名、30代1名の計2名／女：20代1名、30代1名、40代2名の計4名）の心理臨床家が参加した（Table 1 及び Table 2 を参照）。

Table 1 第1回 FOG の実施形態及び参加要件

	実施形態	参加要件
第1回 <i>F. O. G.</i> 200X年1月X日～	通い 3日間	臨床心理養成指定大学院の修士（博士前期）課程に 在学中もしくは修了生で、フォーカシングに関心があ り、守秘義務を遵守でき、研究の意図に同意する者

Table 2 第1回 FOG 参加者の属性の異同

ID	性別	職業	臨床経験年数／学年	フォーカシング 経験	<i>F. O. G.</i> 経験
A	女	臨床心理士	1年目	3回	
B	女	臨床心理系大学院生	修士課程1年生	1回	
C	男	臨床心理系大学院生	修士課程1年生	10回	
D	女	臨床心理士	1年目	5回	1回目
E	男	臨床心理系大学院生	修士課程1年生	2回	
F	女	カウンセラー	1年目	200回以上	

第1セッションの導入に際して、ファシリテーターは、便宜上その役割を担うが同時にグループの一参加者でもあるという姿勢を口頭で伝えた。また、セッション中は、フェルトセンスを尊重し、感じられたありのままを自由に言葉にしてみることが確認された。なお、各セッションの進行中、思考・感情・情動レベルでの交流へ傾きがちと感じられた場合、ファシリテーターは参加者の自由な語りを尊重する態度を保持しつつ、グループのなかの個人 (*individual within a group*)、あるいは全体としてのグループ (*group as a whole*) に対して、フェルトセンスの言語化を促す介入を行った。なお、*F.O.G.*の手続きの詳細は、押岡・勝倉・白岩 (2011) を参照願いたい。

3.2 調査方法及び分析材料並びに分析方法

セッション終了毎に、野島 (2000) を参考に作成した参加者カードを配布し、《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》についての自由記述を求めた。その際、自由記述の内容は、①他の参加者には開示しないこと、②研究目的以外では使用しないこと、を口頭で伝えた。

参加者カードより得られた自由記述の分析には、*TAAS* 4.0 を用いた。参加者カードから得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》についての分析は、*TAAS* を用いた一連の先行研究及び山西 (2011) を参考に、以下の手続きに則り行った。

参加者カードから得られたすべての自由記述を、可能な限り原文に忠実な形で *Microsoft Excel 2010* (以下, *Excel*) へ打ち込み、ローデータの作成を行った。ローデータの作成にあたっては、《満足した点》についての自由記述と、《不満足な点・心残り・気がかり》についての自由記述をそれぞれ別のシートに打ち込んだ。また、①第何回 *F.O.G.*における、②誰の、③第何セッションについての、④何文目の自由記述であるのかが同定できるよう、自由記述 1 文毎に *ID* を割り振った。なお、自由記述欄への記入がなかった場合は、「(無記入)」との打ち込みを行った。

Excel に打ち込まれたローデータを *TAfS* にインポートした後、記述者の心の動きを把握することに重きを置く感性分析によりキーワードを抽出した。抽出されたキーワードをカテゴリーとして抽出する際には、林原ら (2011 a, b) 及び大和 (2010) 他の先行研究を参考に、暫定的な基準として出現頻度 10 回以上のキーワードを第 1 次カテゴリーとして機械的に抽出した。抽出された第 1 次カテゴリー及び出現頻度 9 回以下のキーワードに対して、①日本語・英語で記された内容、例えば、「フェルトセンス」と「*Felt-sense*」の統合、②意味による統合—例えば、「自分」、「自分自身」、「私」の統合、③単体では意味の付与が困難なキーワード、例えば、「いる」、「ある」、「なる」の削除、を中心とした洗練作業を施した。その際、①どのキーワードをどのカテゴリーに追加したのか、②どのカテゴリー同士を統合したのか、③どのカテゴリーを削除したのか、そして、④それぞれの理由、の 4 点を時系列的に記した分析ノートを作成し、*TAfS* による分析過程を記録した。なお、カテゴリーの洗練作業等は、先行研究及び分析ノートを参考にしながら、共同研究者との綿密な議論を重ね修正・検討を行った。

洗練作業が飽和状態に達した第 2 次カテゴリーを統計学的に要約する目的から、*TAfS* より得られた第 2 次カテゴリーを変数とした主成分分析を行い、《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》についての主成分をそれぞれ抽出した。なお、本研究では統計解析ソフトとして、*IBM SPSS Statistics 19.0.0.2* を用いた。

4. 結果

4.1 <リサーチ・クエスチョン 1>について

参加者カードから得られた《満足した点》(n=73) について、感性分析によりキーワードを抽出した結果、267 個のキーワードが抽出され、出現頻度 10 回以上のキーワード、①感じる (26 回)、②自分 (21 回)、③できる (16 回)、④なる (14 回)、⑤話 (13 回)、⑥いる (11 回)、⑦聴く (11 回)、⑧身体 (10 回) の 8 個を第 1 次カテゴリーとして機械的に抽出した。機械的に抽出した 8 個の第 1 次カテゴリー及び出現頻度 9 回以下のキーワードについて、複数回の確認・洗練作業を行った結果、①感じる (26 回)、②言語化 (26 回)、③自分 (22 回)、④身体 (19 回)、⑤メンバー (12 回)、⑥聴く (11 回)、という 6 個の第 2 次カテゴリーが生成された。

TAfS より得られた《満足した点》を構成する 6 個の第 2 次カテゴリーを統計学的に要約

するために、主成分分析を行った (Table 3 を参照)。

主成分 1 は、固有値 1.73, 主成分 2 は固有値 1.45, 主成分 3 は固有値 1.16 であった。主成分 4 は固有値 0.68 で 1.0 以下であったため、固有値 1.0 以上の 3 成分を主成分として採用した。主成分 3 までの累積寄与率は 72.31% であり、主成分分析より得られた結果は《満足した点》について十分論証することが可能であると判断した。

《満足した点》の主成分 1 は、変数「メンバー」及び「感じる」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた。そこで、主成分 1 を「他者との関わりの感覚」と解釈した。主成分 2 は、変数「自分」及び「言語化」が正の方向へ特に大きく、変数「身体」が負の方向へ大きいという特徴を示していた。そこで、主成分 2 を「自己の発信」と解釈した。主成分 3 は、変数「身体」及び「感じる」が正の方向へ特に大きく、変数「聴く」が負の方向へ大きいという特徴を示していた。そこで、主成分 3 は、「自己の身体感覚」と解釈した。

Table 3 《満足した点》に係る主成分分析の結果

変数	主成分 1	主成分 2	主成分 3
	他者との関わりの感覚	自己の発信	自己の身体感覚
感じる	0.71	-0.04	0.52
言語化	0.42	0.70	-0.05
聴く	0.59	-0.19	-0.49
メンバー	0.79	0.06	-0.28
身体	0.28	-0.55	0.64
自分	-0.05	0.79	0.41
固有値	1.73	1.45	1.16
累積寄与率	28.81%	52.91%	72.31%

4.2 <リサーチ・クエスチョン 2>について

参加者カードから得られた《不満足な点・心残り・気がかり》(n=70) について、感性分析によりキーワードを抽出した結果、257 個のキーワードが抽出され、出現頻度 10 回以上のキーワード、①自分 (18 回)、②する (17 回)、③いる (15 回)、④感じる (15 回)、⑤ある (14 回)、⑥なる (11 回)、⑦思う (10 回)、⑧話 (10 回) の 8 個を第 1 次カテゴリーとして機械的に抽出した。機械的に抽出した 8 個の第 1 次カテゴリー及び出現頻度 9 回以下のキーワードについて、複数回の確認・洗練作業を行った結果、①言語化 (29 回)、②自分 (21 回)、③感じる (17 回)、④メンバー (13 回)、⑤身体 (12 回)、という 5 個の第 2 次カテゴリーが生成された。

TAFS より得られた《不満足な点・心残り・気がかり》を構成する 5 個の第 2 次カテゴリーを統計学的に要約するために、主成分分析を行った (Table 4 を参照)。

主成分1は、固有値 1.83、主成分2は固有値 1.19 であった。主成分3は固有値 0.86 であったが、主成分3までの累積寄与率が 77.61%であったため論証可能性は十分と判断し、主成分3までの3成分を主成分として採用した。

《不満足な点・心残り・気がかり》の主成分1は、変数「言語化」及び「自分」並びに「メンバー」が正の方向へ特に大きく、変数「身体」が負の方向へ大きいという特徴を示していた。そこで、主成分1を「自己の発信ができない」と解釈した。主成分2は、変数「感じる」及び「身体」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた。そこで、主成分2を「自己の身体感覚を感じられない」と解釈した。主成分3は、変数「身体」及び「メンバー」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた。そこで、主成分3を「他者の身体内感覚を感じられない」と解釈した。

Table 4 《不満足な点・心残り・気がかり》に係る主成分分析の結果

変 数	主成分1	主成分2	主成分3
	自己の発信ができない	自己の身体感覚を感じられない	他者の身体内感覚を感じられない
感じる	0.23	0.84	-0.21
自分	0.68	0.42	-0.11
メンバー	0.67	-0.17	0.59
言語化	0.80	-0.16	0.05
身体	-0.47	0.50	0.67
固有値	1.83	1.19	0.86
累積寄与率	36.63%	60.39%	77.61%

5. 考察

本研究は、第1回 *F.O.G.*参加者から得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》に係る自由記述について、体系的、計量的分析を施し、*F.O.G.*のグループ・プロセスについての仮説生成を目的とした。

まず、第1回 *F.O.G.*の参加者から得られた《満足した点》に関する自由記述についての体系的、計量的分析の結果から、*F.O.G.*において、参加者が満足感等を覚えるに至るグループ・プロセスの一形態として、次の仮説を提示しておきたい。

*F.O.G.*の参加者は、「他者との関わり感覚」により、安心できる存在としての複数の他者を感じ、その安心感を基盤として、集団内で多方向的な相互作用を経験する。そして、個人が「他者との関わり感覚」を覚える状態に入ると、同時に、「自己の身体感覚」が賦活され「自己の発信」が行われるようになる可能性が考えられる。

一方、第1回 *F.O.G.*の参加者から得られた《不満足な点・心残り・気がかり》に関する

自由記述についての体系的、計量的分析の結果から、*F.O.G.*において、参加者が不満足等を覚えるに至るグループ・プロセスの一形態として、次の仮説を提示しておきたい。

*F.O.G.*参加者は、「他者の身体内感覚を感じられない」状態であったり、「自己の身体感覚を感じられない」状態であったりすることによって、集団内で「自己の発信ができない」状態に陥り、不満足や心残り、気がかりを覚える可能性があると考えられる。仮に、この仮説が正しかった場合、身体感覚の賦活を目的としたワーク、例えば、「からだほぐし（白岩，2006 他）」等を *F.O.G.*プログラム内に導入することは、*F.O.G.*参加者の不満足や心残り、気がかりを軽減する一助になると考えられる。

ただし、これらの仮説は、第1回 *F.O.G.*ワークショップの記録のみから得られた限定的なものである。第1回 *F.O.G.*ワークショップは、そのモデル構成や参加者の属性等に偏りの問題が認められるため、本研究から得られた仮説が今後の *F.O.G.*モデル構成全てに適用して考えられるか否かについては、一定の保留が必要である。そこで、以下、第1回 *F.O.G.*モデル構成における偏りの問題を指摘し、実践及び研究上の今後の課題を明らかにしておきたい。

まず、ファシリテーターが1名であったことについてである。第1回 *F.O.G.*では、単独ファシリテーター方式を採用した。米国 *The Focusing Institute* の認定コーディネーターによるファシリテーションの質は高いものであったと推察されるが、一方では、次の問題も指摘できる。すなわち、集団的相互作用を促進し、一方では、参加者各々が新しい視点について学び、それらを内在化していけるような関係作りや雰囲気作りを援助するという役割を数日に渡り担うこと（佐治ら，1977）、そして、グループの場に流れる個人あるいは集団力動について、ファシリテーター自身がフェルトセンスを言語化していくとともに、参加者がいかに自己のフェルトセンスに触れ続けることができているか、という点についても注意を向け続けること（白岩・井上，1985）、この2点を単独のファシリテーターが担うことは、重度の負担を強いることになりかねないという問題である。そこで、フェルトセンスの言語化を介しての集団的相互作用のさらなる活性化及び倫理的配慮という側面から、複数ファシリテーター、すなわち、コ・セラピー方式による *F.O.G.*モデル構成を行う必要があると考える。

次に、3日間の通い形式であったことについてである。参加者は、フェルトセンスの言語化を介しての集団的相互作用によって、他者と関わり、ときには心理臨床家としての課題と直面し、それらのいくつかを解決する経験を積み重ねることになる。しかし、通い形式であることは、同時に、教育・訓練という時間から一時的に解放されて日常生活を送るという経験をもすることになる。換言すれば、心身ともに日常と非日常との間を行き来しながら、心理臨床家としての教育・訓練のための3日間を過ごすことになる。すなわち、《満足した点》についての仮説は、*F.O.G.*以外の日常生活からの影響で得られた可能性を完全には否定できず、また、《不満足な点・心残り・気がかり》についての仮説は、日常場面より

持ち込まれた心身の状態の結果によって生じた可能性も指摘できる。日常生活からの影響という変数を統制するためには集中的なグループ経験、すなわち宿泊形式での *F.O.G.* モデル構成を行う必要があると考える。

最後に、参加者を臨床心理士養成指定大学院に在籍中もしくは修了した者と限定したことについてである。先にも指摘したとおり、*F.O.G.* はフェルトセンスの言語化を介しての集団的相互作用を用いた心理臨床家に対する教育・訓練モデル構成であり、その実践と研究でもある。本研究の対象とした第1回 *F.O.G.* は、そのパイロットスタディーとして実施されたものであった。臨床的な介入実験でもあることから、倫理面及び安全面への配慮は不可欠であった。したがって、第1回 *F.O.G.* の参加者は、フォーカシングに関心を寄せ、且つ、フェルトセンスの言語化、すなわち、フォーカシング経験を有する心理臨床家を対象とする必要があると考えた。これらの配慮の結果、一事例ではあるものの押岡・白岩 (2008) において、第1回 *F.O.G.* モデル構成は一定の効果と安全性が確認された。今後、事例の積み重ねをとおして、*F.O.G.* の効果と安全性の確認を行いつつ、徐々にその対象の範囲を広げ、あらゆる流派・学派の心理臨床家を対象とした *F.O.G.* モデル構成についての実践と研究を行う必要があると考える。

上記3点の他にも、メンバーには入れ替わりのないクローズド・グループで実施したこと、参加者やファシリテーターの性別等々、*F.O.G.* に限らずグループのモデル構成を行う際には熟考せねばならない要素が多く存在する。今後、様々な *F.O.G.* モデル構成から得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》についての自由記述に関する体系的、計量的分析をとおして、本研究より生成された仮説の更なる洗練が行われることを期待するとともに、本研究と同様の分析方法を用いた種々のグループ・アプローチにおけるグループ・プロセスとの比較研究を行い、*F.O.G.* 固有のグループ・プロセスが明らかになることを期待したい。

付記

本研究の執筆にあたり、第1回フォーカシング指向グループワークショップへご参加いただいた心理臨床家の皆様へ深甚なる感謝を捧げます。

文献

福盛英明・森川友子 (2003) : 青年期における【フォーカシング的態度】と精神的健康度との関連 - 【体験過程尊重尺度 (The Focusing Manner Scale: FMS)】作成の試み 臨床学研究 20 (6), 580-587.

Gendlin, E.T. (1964) : A Theory of Personality Change. In Worchel, P. & Byrne, D. (eds.), *Personality Change*. New York: John Wiley. 100-148.

Gendlin, E.T. (1981) : *Focusing*. New York: Bantam.

Gendlin, E.T. (1996) : *Focusing-Oriented Psychotherapy: A manual of the experiential*

- method.* New York: Guilford.
- Gendlin, E.T. & Beede, J. (1968) : *Experiential groups, Instructions for groups.* Gazda, G.M. (ed.) , *Innovations to group psychotherapy.* Bloomington, IL: Thomas. 190-206.
- Glaser, B.G. & Strauss, A. L. (1967) : *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research.* New York: Aldine De Gruyter.
- 濱田恵子・野島一彦 (2009) : 「半構成方式」エンカウンター・グループにおける“話すことが難しい”メンバーへのファシリテーションの一考察 九州大学心理学研究 10, 177-183.
- 林原 慎・藤井志保・宮里智恵・伊藤圭子・平川幸子 (2011 a) : 小学校における国際理解の視点を取り入れたジェンダー教育の効果に関する研究 広島大学学部・附属学校共同研究紀要 39, 249-254.
- 林原 慎・川崎正盛・小早川善伸・安松洋佳・中村千絵・深澤・清治・平川幸子 (2011 b) : 多文化共生社会の視座に立つ小学校外国語活動の単元開発に関する研究—テキストマイニングによる効果の分析 広島大学学部・附属学校共同研究紀要 39, 177-182.
- 樋口耕一 (2004) : テキスト型データの計量的分析：2つのアプローチの峻別と統合 理論と方法 19 (1), 101-115.
- 井上真奈美・鈴木結香 (2011) : 看護系大学における放射線に関する教育内容の現状 山梨県立大学学術情報 4, 9-11.
- 石田基広 (2008) : Rによるテキストマイニング入門 森北出版株式会社.
- 角田 豊 (1994) : 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究 42, 193-200.
- 川住隆一・吉武清實・西田充潔・細川 徹・上埜高志・熊井正之・田中真理・安保英勇・池田忠義 (2010) : 大学における発達障害のある学生への対応—四年制大学の学生相談機関を対象とした全国調査を踏まえて 東北大学大学院教育学研究科研究年報 59 (1), 435-462.
- 川喜田二郎 (1970) : 続・発想法 中央公論社
- Klein, M.H., Mathieu, P.L., Gendlin, E.T., & Kiesler, D.J. (1970) : The Experiencing Scale. *A Research and Training Manual*, 1, 56-63.
- 棟方哲弥・中村 均・金森克浩・土井幸輝 (2010) : 特別支援学校におけるアシスティブ・テクノロジー活用事例の体系的整理と分析 電子情報通信学会技術研究報告 110 (209), 11-16.
- 村山正治 (1980) : エンカウンター・グループの過程でフォーカシングを導入した一事例 日本心理学会第44回大会発表論文集 637.
- 野島一彦 (2000) : エンカウンター・グループのファシリテーション ナカニシヤ出版.
- OSHIOKA, Daisuke (2009) : Possibilities and problems of group interactions with

- emergence of words from the felt-sense. *The 21st International Focusing conference in Japan, Program Book*, 3.
- 押岡大覚 (2011) : フェルトセンスの言語化を介しての集団的相互作用を用いた心理臨床家の教育・訓練モデル構成に関する実証的研究 東京成徳大学大学院博士論文.
- 押岡大覚・勝倉孝治・白岩絃子 (2009) : Felt-sense の言語化と集団的相互作用に関する量的視点からの検討 日本人間性心理学会第 28 回大会発表論文集 62-63.
- 押岡大覚・勝倉孝治・白岩絃子 (2011) : 心理臨床家養成のためのフォーカシング指向グループへの継続参加とその効果に関する研究 人間性心理学研究 28 (2), 39-50.
- 押岡大覚・白岩絃子 (2008) : Felt-sense Focused Group に関する基礎的研究 日本人間性心理学会第 27 回大会発表論文集 142-143.
- Purton, C. (2007) : *Focusing-Oriented Counseling Primer*. UK: PCCS Books.
- Rogers, C.R. (1970) : *Carl Rogers on Encounter Groups*. New York: Harper & Row, Publishers, Inc.
- 佐治守夫・石郷岡 泰・上里一郎 (1977) : グループ・アプローチ 誠信書房.
- 白岩絃子 (2006) : 吐く息を意識する「からだ ほぐし」とフォーカシング 目幸黙僊・黒木賢一 (編) 心理臨床におけるからだー心身一如からの視座 朱鷺書房 132-153.
- 白岩絃子・井上澄子 (1985) : FOCUSING による GROUP WORK の試み 日本応用心理学会第 5 回大会発表論文集 35.
- 田中英理・山西博之 (2011) : 英語音声学・音韻論的特徴の習得を目指した授業効果検証 JALT journal 33 (1), 49-99.
- 山西博之 (2011) : 教育・研究のための自由記述アンケートデータ分析入門: SPSS Text Analytics for Surveys を用いて 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジャー研究部会 2010 年度報告論集, 110-124.
- 大和里美 (2010) : キャリア教育における参加型授業の有効性に関する検討ーテキストマイニングによる効果分析 太成学院大学紀要 12, 139-149.